ミライは学校

- 普通は変化する -

01 concept　設計趣旨

「ミライは学校」とは、「提案する建築が未来に学校になる」と言う意味と、「地域コミュニティの未来は学校教育のあり方にある」と言う意味がある。課題の「フクシマを変える建築」に対し、原発事故の影響が大きい被災地で今後の「教育とその器」のあり方を再考することが、福島の未来に直結すると考えた。原発事故による影響が長期化する双葉町、そこでは、住人同士もコミュニケーションが取り難く、家族間でも心の分断が生じているとの報告もある。それらを少しでも解決でき、或いは、再構築を考えられる人材を育成する器づくりが、本設計の出発点である。

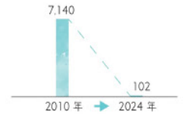
02 survey　双葉町の現状

13年前の福島第一原発事故により、双葉町は甚大な被害にあった。今でも町の85%は帰還困難区域に指定されており、事故以前は7,140人だった人口も102人まで減少している。学校も小学校が2校、中学校と高校がそれぞれ1校ずつあったが、現在町に学校はひとつもない。もし現状で双葉町に住む場合、学校は隣町まで通わなくてはならない。

■ 普使われていた建物で今は残っていない。
■ 建物は残されているが現在は使われていない。
■ 新しくできて使われている建物。

- 双葉町への帰還意向調査 -

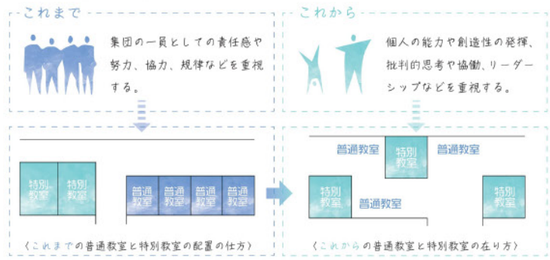
- 双葉町の人口の変化 -



帰還意向調査の結果によると半数以上の人が帰町を諦めてしまっている。帰町しない理由には「既に避難地で生活の基盤ができているから」などがあげられる。事故発生以前の町に戻す“復興”を目指すのは現実的ではなく、新たな人を呼び込み「ゼロから新しい町をつくりあげる」ことが求められている。

03 introduction　学校教育の未来

▶ これまでとこれから



自己表現の大切さ

これまでの学校教育では“みんなと同じ”を好み、「自己表現」をする人が少ない。しかし、「自己表現」は他人とコミュニケーションを取るための協調性や社会性を身につけるだけでなく、理解力や判断力、思考力を養う基礎作りにもなるため必要不可欠である。

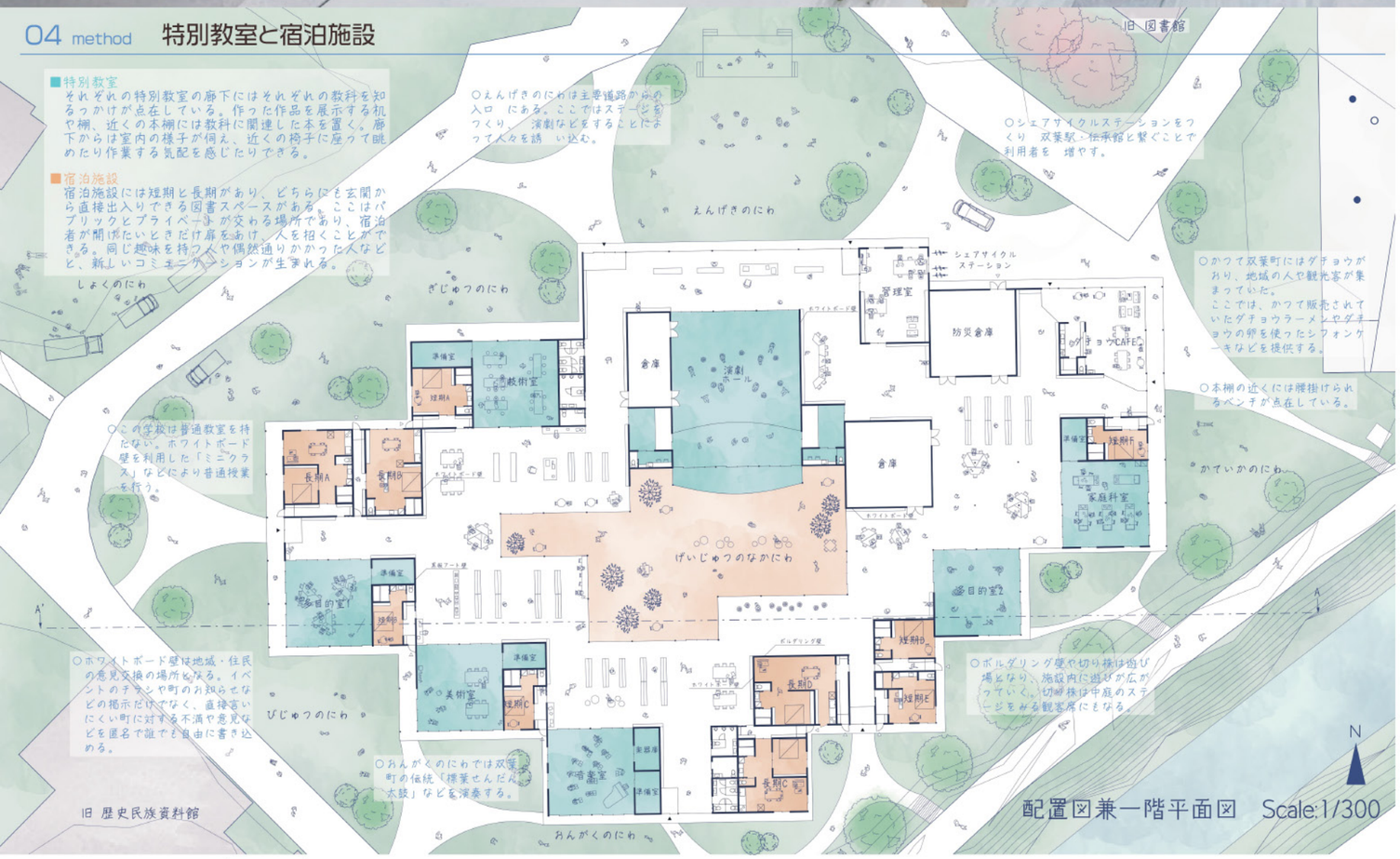
教室の在り方

従来の普通教室中心の教育スタイルから特別教室を核とした教育スタイルへ。固定した普通教室を持たず、点在する特別教室の周辺が普通教室としての役割を担う。どんな場所でも授業が展開でき、フレキシブルな授業に対応する。

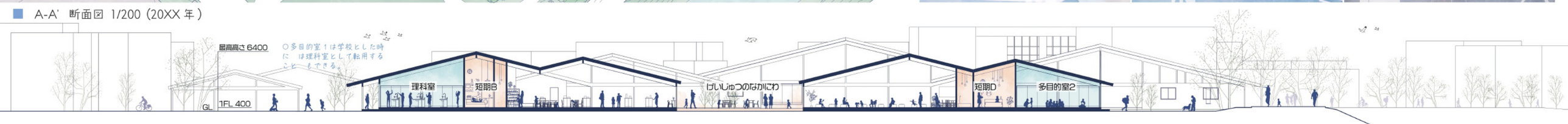
04 method　特別教室と宿泊施設

■特別教室
それぞれの特別教室の廊下にはそれぞれの教科を知るっかけが点在している。作った作品を展示する机や棚、近くの本棚には教科に関連した本を置く。廊下からは室内の様子が伺え、近くの椅子に座って眺めたり作業する気配を感じたりできる。

■宿泊施設
宿泊施設には短期と長期があり、どちらにも玄関から直接出入りできる図書スペースがある。ここはパブリックとプライベートが交わる場所であり、宿泊者が開けたいときだけ扉をあけ、人を招くことができる。同じ趣味を持つ人や偶然通りかかった人など、新しいコミュニケーションが生まれる。

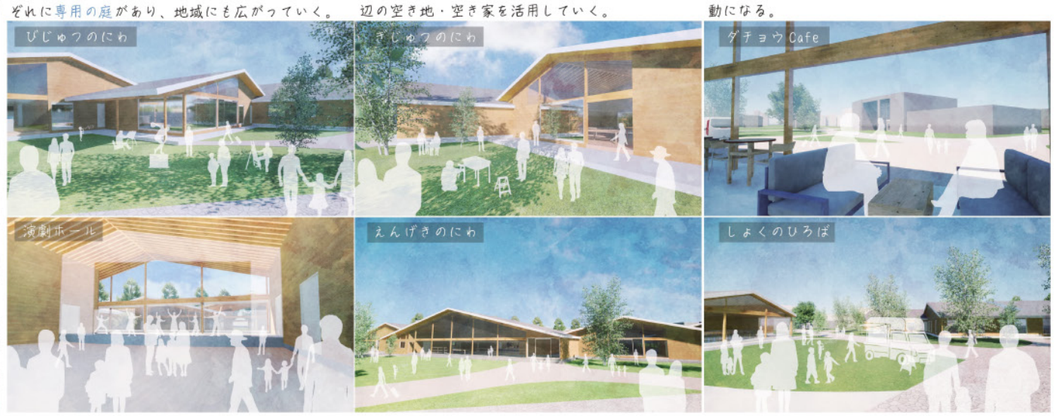


■ A-A' 断面図 1/200（20XX年）



05 method　変わり続ける学校

提案（202X年）	十数年後（203X年）	未来（20XX年）
双葉町の人口は少なく、子供はまだ居ない。ここは、好きなことを見つけながら自分を表現する場所として、地域の人々があつまり、文化創造施設のような役割を果たす。特別教室前の廊下にも活動が広がり、好きを見つけるきっかけをつくる。それぞれに専用の庭があり、地域にも広がっていく。	人口が増え、双葉町にも子供が住むようになる。宿泊機能の一部を改築し、学校として運用していく。放課後や空き教室は常に地域に解放し、地域の人も講師となり授業をする。技術室をリノベーション活動の拠点としながら周辺の空き地・空き家を活用していく。	この学校を中心として地域コミュニティが形成され、新しい双葉町がつくられていく。使われなくなっていた図書館をリノベーションして活用したり、食堂をつくり地域の人も集まる「まちの食堂」にしたり。学校での活動がまちでの活動になる。



06 spatiality　木質空間と光

県産木材の利用と温暖な気候を生かしたパッシブデザイン